

男と女の秩序

コリント人への手紙第一 11章 2-16節

はじめに

クリスマスも終わり、今年最後の説教となりました。久しぶりに、コリント人への手紙第一からの説教となります。

コリント人への手紙第一は、11-14章まで「礼拝の混乱に対する教え」が書かれています。コリント教会の礼拝では、いくつかの具体的な問題が起きていました。礼拝の時のかぶり物の問題、聖餐式の問題、聖霊の賜物の問題、異言の問題などがありました。そこでパウロがこの手紙を通して、それらの問題に対する信仰による解決策を書いているのです。

1. 祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けるかどうか

今日の聖書箇所には、礼拝の中で祈りや預言をする時に、頭にかぶり物を着けるかどうかという問題です。

当時の習慣では、女性は外出する時には頭にヴェールのようなかぶり物を着けるのが一般的だったようです。しかしコリント教会では、礼拝の中で祈りや預言をする時に、かぶり物を脱ぎ捨てる女性がいたようです。その理由の一つは、祈りや預言をするうちに、熱狂的になって頭を振り始め、かぶり物を脱ぎ捨てたと思われる。もう一つの理由は、神様の前では男性も女性も関係ない、特に祈りや預言をする時には男性も女性も関係ないと考えて、かぶり物を脱ぎ捨てたと思われる。

このような状況の中で、コリント教会の中で様々な意見があり、多少の混乱が起きていたようです。それに対してパウロは、このように答えます。①男性は、礼拝の中で祈りや預言をする時には、頭にかぶり物を着けるべきではない、②女性は、礼拝の中で祈りや預言をする時には、頭にかぶり物を着けるべきである。

これは、当時の習慣や文化の中での教会のあり方であって、現代の日本に住む私たちに当てはまることではありません。当時は、男性は髪を短くし、かぶり物を着けないことが一般的であり、女性は髪を長くし、外出の時にはヴェールのようなかぶり物を着けることが一般的であったのです。大切なことは、男性は男性として神様の前で礼拝すべきであり、女性は女性として神様の前で礼拝すべきである、ということです。

確かに神様の前では、男性も女性も存在の価値や救いにおいては、優劣はなく平等です。しかし神様の前では、男性と女性には定められた秩序があり、役割に違いがあるのです。

3 節でパウロは、「**すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です**」と言っています。パウロはなぜ礼拝の中で祈りや預言をする時に、女性がかぶり物を着け、男性がかぶり物をつけてはならないか、そのことについて興味深い説明をしています。

男性のかしらはキリストです。礼拝の中で祈りや預言をする時、頭にかぶり物を着けることはキリストを隠すことになる、礼拝はキリストの栄光を現わすものであるから、キリストを隠したら礼拝ではなくなる、だからこそ男性は頭にかぶり物をしてはならないとパウロは言うのです。

逆に女性のかしらは男性です。礼拝の中で祈りや預言をする時、頭にかぶり物を着けることは男性を隠すことになる、礼拝では男性の栄光ではなくキリストの栄光を現わすものであるから、男性を隠すことでキリストだけを礼拝できる、だからこそ女性は頭にかぶり物をするべきなのだというのです。

いずれにしても、神様を礼拝することにおいては男性も女性も平等です。当時の教会は、男性も女性も祈りや預言をしたのです。預言というのは、神様の言葉を預かり、人々に伝えることです。しかしパウロは、男性は祈りや預言をする時には、かぶり物をつけてはならない、女性は祈りや預言をする時には、かぶり物をつけなければならないと言ったのです。

それは、神様が定められた秩序を重んじて、自分が男性であること又は女性であることを受け入れつつ、神様を礼拝すべきであるということです。神様が定められた秩序を重んじることこそ、神様の栄光を現わすことであり、私たちの礼拝なのです。

礼拝は、私たちの熱狂的な感情によって、私たちの自由に好きなように行うものではありません。聖書に従って、神様が定められた秩序に従って、神様が求めている礼拝を捧げるべきなのです。そうでなければ、神様にとって的外れな礼拝になってしまいます。的外れな礼拝は、神様の栄光を現わしません。礼拝は、私たちの心を満たすために行なうものではありません。神様が求めているものを行ない、神様の栄光を現わすために行なうのです。

2. 神が定めた男と女の秩序

神様は、男性と女性に秩序を設けられました。女性のかしらは男性であり、男性のかしらはキリストであるという秩序です。これは、神様が私たち人間を造られた時の創造の秩序に根拠があります。

神様はまず大地のちりで人を形造り、いのちの息を吹き込んで男性を造られました。そして神様は、「**人がひとりているのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう**」(創世記 2:18)と言われて、男性のあばら骨を取って女性を造られました。男性が先に造られ、女性は男性の助け手として後から造られました。この創造の秩序に従って、男性と女性の秩序が定められたのです。

今日の聖書箇所 7 節には、「**男は神のかたちであり、神の栄光の現れなので、頭にかぶり物を着けるべきではありません。一方、女は男の栄光の現れです**」とあります。もちろん男性も女性も「神様のかたち」に造られた尊い存在ですが、男性は特に神様の代理としてこの地上を治め、管理することを通して神様の栄光を現わす役割を与えられています。この役割は女性にも与えられていますが、女性は特に「男性の栄光の現れ」とあるように、男性の助け手として男性を支えることを通して、神様の栄光を現わす役割を与えられているのです。

神様は、アダムとエバが禁断の木の実を食べて神様に背いた時、まずアダムに呼びかけました。「**あなたはどこにいるのか**」(創世記 3:9)と。禁断の木の実を最初に食べたのはエバでした。しかし神様はまず男性のアダムを呼び、アダムに責任を問うたのです。それは、女性のかしらが男性だからです。

また神様は、アダムとエバが禁断の木の実を食べて神様に背いた時、アダムのゆえに大地をのろわれました。「**大地は、あなたのゆえにのろわれる**」(創世記 3:17)と。禁断の木の実を最初に食べたのはエバでした。しかし神様はエバのゆえに大地をのろうのではなく、アダムのゆえに大地をのろわれたのです。それは、神様の代理としてこの地上を治め、管理して神様の栄光を現わす責任は、まず男性にあるからです。

アダムとエバはなぜ禁断の木の実を食べたのでしょうか。エバが蛇に惑わされ、アダムがエバの声に聞き従ったからです。神様はアダムにこう言われました。「**あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地はあなたのゆえにのろわれる**」(創世記 3:17)。

男性であるアダムは、女性であるエバに聞き従って罪を犯したのです。アダムはエバのかしらでした。しかしエバの声に聞き従って罪を犯したのです。そしてアダムは、神様に責任を問われた時、エバに責任転嫁したのです。

アダムとエバは、神様が定められた男性と女性の秩序を破ったのです。神様が定められた秩序が崩れたことにより、私たち人間に罪が入り、私たち人間は神様との関係を失い、神様の怒りと呪いを受けるべき存在となったのです。

私たち人間の罪の本質は、神様が定められた秩序を破ることです。男性と女性の秩序、親と子の秩序、そして神様と人間の秩序。この神様が定められた秩序を破ることによって、私たち人間に、あらゆる悲しみや苦しみ、孤独と争い、肉体の死と永遠の刑罰が生まれてきたのです。

おわりに

私たちは、生まれた時から秩序が混乱している社会と世界の中で生きています。しかし神様は、聖書を通して御自身の御心を啓示して、本来、神様が定められた秩序はどのようなものかを私たちに語りかけています。

私たちは、神様が定められた秩序に社会と世界を回復させていかなければなりません。それこそ、イエス様を信じて神様との関係を回復し、神の国のために生かされている私たちの使命です。秩序の混乱は、家庭の中に、社会の中に、そして教会の中に、礼拝の中にも起きて来ます。私たちは、聖書を通して神様が定められた秩序を学び、その秩序を回復していかなければなりません。神様が定められた秩序に従っていく時にこそ、神様の栄光が現されるのです。

最後にもう一度、男性と女性の秩序の話に戻ります。神様は私たち人間を男性と女性に造られました。そして男性をかしらとして、女性を助け手として造られました。しかしどちらも神様のかたちとして造られた尊い存在です。存在の価値において優劣はありません。男性と女性は、役割の違いがあり、お互いを補い合い、支え合って生きるのです。11-12節でパウロはこのように言っています。「**とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。女が男から出たのと同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から出ています**」。男性だけでは生きていけません。女性だけでも生きていけません。教会や家庭や社会が男性だけだったらどうなるでしょうか。また教会や家庭や社会が女性だけだったらどうなるでしょうか。男性は女性を必要としており、女性は男性を必要としているのです。男性と女性が、神様が定められた秩序に従って、補い合い、支え合って、教会や家庭や社会を形成していくことが神様の求めておられることなのです。

私たち人間は、三位一体の神様のかたちに似せて造られました。三位一体の神様は、父と子と聖霊の唯一の神様です。父と子と聖霊は、力と栄光において同等です。しかし役割に違いがあります。父は救いを計画し、子は救いを成し遂げ、聖霊は救いを私たち人間に適用します。父と子と聖霊は役割に違いがありますが、力と栄光において同等の唯一の神様です。

男性と女性も、役割に違いがありますが、存在の価値と救いにおいては同等なのです。私たちは、男性に生まれることも女性に生まれることも選べませんでした。男性に生まれることは神様からの召命であり、女性に生まれることも神様からの召命です。大切なのは、神様からの召命に従って生きることです。神様からの召命に従って、男性は男性らしく生き、女性は女性らしく生きることです。

現代においては、性における混乱が激しく、複雑な問題が沢山あります。例えば、同性愛、両性愛、性同一性障がいなど、その原因の特定や対応が難しい複雑な問題があります。現に当事者たちは大きな苦しみを抱えており、この問題は単純な解答では済まされません。また女性の社会進出が奨励される時代になり、草食系男子という言葉も出てくるようになりました。

このような複雑な社会の中で、イエス様を信じて神様との関係を回復した私たちは、神

様が定められた秩序とは何かを聖書から丁寧に学び、神様と隣人への愛を持ちながら、神様からの召命に従って教会と文化の発展に仕えることを通して、神様の栄光を現わしていかなければなりません。